

# 成果報告書

## I. 研究概要

氏名	ロイ・レスミー
所属	王立プノンペン大学・日本語学科（学科長）
招聘回（招聘期間）	第5回（2010年10月1日～2011年3月31日）
招聘研究テーマ	カンボジアの大学生むけの日本語教授法 ー学習者と教師の関係中心にー
研究目的	<p>国際交流基金の海外日本語教育機関調査(2009)によると、1979年から2009年の間に学習者数は28.7倍に増加し、東アジアの学習者数はトップで、その次は東南アジアの学習者数(908,248人、24.9%)だそうである。この調査からさらに分かったことは東南アジアに位置しているカンボジアの周りの諸国、タイ、ベトナム及びラオスは日本語学習者が増えているのに、カンボジアだけが日本語学習者は減っていることである。また、王立プノンペン大学日本語学科に入学した新入生数は最初のごろと比べてみると、この近年は減っている。それはなぜだろうか。</p> <p>ある日本語学科の卒業生の卒業論文ではカンボジアの大学生の日本語学習者は中級後半レベルになると、なかなかそれ以上のレベルになかなか達成できなくて、学習モチベーションがダウンになってしまう。特にカンボジアの日本語教育機関ネットワークの代表として選ばれた王立プノンペン大学日本語学科の学生は該当になっている。原因として挙げられたのは日本語は難しくて勉強しても、上級レベルまでなれないし、日本語を勉強しても、日本語を使う仕事が見つかるかどうか分からないからだと言われた。</p> <p>私はその意見に全く賛成しないわけではないが、それよりカンボジアの大学生の日本語学習者は日本語学習に抱いている別の大きな問題があるように見えた。それは私自身が日本語学科で日本語を教えながら、日本語学科長も務めさせていただいたため、在学生からも卒業生からも日本語学科の教師の教え方や行為に対する不満感をしばしば聞いているし、日本語学科の会議で教師からも学生に対する不満感を聞いているので、どうも教師と学生の関係に何かコンフリクトが起きているだろうと思った。</p> <p>長い内戦のせいで、人材が非常に少なくなってしまったカンボジアは、国作りのにいい人材が求められている。そこで教育現場ではいい人材を育成するにはこういう問題は無視することはできないと思い、今回の研究テーマにした。</p> <p>本研究を通して、カンボジアの大学生は日本語を学習していく上で、教師にどのようなことを要求しているか、さらに教師と学生との関係にどのように語学学習に影響があるのかと明らかにしたい。</p>

研究概要：本研究調査質問紙は川口義一&横溝紳一（2005）と国際交流基金（2006）を参考にして作った。市川伸一（1995）学習者のやる気を引き出すために、教師と学習者の信頼関係が重要である。また、片桐準二（2007）学習者のビリーフは言葉を勉強する時の気持ちや勉強の方法に大変影響を与え、学習者と教師のビリーフの違いも大切である。

カンボジアの大学の日本語学習者と日本語教師の日本語教育に対する考えのコンフリクトの原因とは何かと幅広く知るため、調査質問の内容は①現在外国語教育に関する目的・到達目標や満足感、②教師に対するイメージ、③外国語授業のあり方、④外国語学習ビリーフ、⑤これから日本語教育現場の教師と学習者との関係の重要性の5つに大きく分けられ、それぞれの領域で項目をランダムに配置した。①と②はの質問項目には複

数回答の形で当てはまる項目に○を付けてもらう。③と④はそれぞれの質問に5～1の数字で答えてもらうものである。数字のそれぞれは、5＝強くそう思う、4＝そう思う、3＝どちらとも言えない、2＝あまりそうは思わない、1＝全くそうは思わない、という意味である。⑤はそれぞれの項目に意見を述べる形である。

カンボジアの四つ大学の大学生292人と教師18人、日本の大学で留学しているカンボジア人学生14人、日本の大学で勉強している日本人学生43人と日本の大学で留学している中国人と韓国人7人、日本の大学の教師4人から集められてきた答えを三つの段階に分けて、結果分析と考察をしていきたい。

まずは、調査内容①現在外国語教育に関する目的・到達目標や満足感と②教師に対するイメージに関しては答えの百分率(Percentage)を比べながら、見ていきたい。その次は、調査内容③外国語授業のあり方と④外国語学習ビリーフに関しては答えの平均(Average)と標準偏差(SD)を使い、調査結果を考察したい。それから、調査内容⑤これから日本語教育現場の教師と学習者との関係の重要性に関してはKJ法による分類を行う。

調査分析結果からは、今、カンボジアにおける大学日本語教育現場、特に日本語を必修科目として行っているカンボジアの大学日本語教育機関では、大学生と教師によるコンフリクトの原因の背景は以下のようなことになっていることが分かった。

①日本語を主専攻としているカンボジアの大学生と教師は同じカンボジアで日本語を主専攻としていない大学の学生と教師と「現在日本語授業の満足感」の考えが大きく違う。つまり日本語を主専攻としている大学の学生も教師も外的帰属し、例えば学生の方は「日本人教師による異文化接触のコンフリクト」、教師の方は「大学の環境や学生の不真面目」と思っている。それに対し、日本語主専攻ではない大学教師は内的帰属し、例えば「自分の日本語能力や教え方に疑問がある」と答えた。

②カンボジアの大学の教師は「教師は医者(カウンセラー)のような存在」だと答えたことから、大学生を患者あるいはクライアント(悩みや問題を持っている人)として扱い、毎日学生達に命令や規則のような厳しいことなどばかり伝えているのであろう。

③「外国語授業のあり方」及び「外国語学習ビリーフ」に対する考え方はカンボジアの大学の学生と教師とは大きなギャップが明らかに見られる。つまり教師は学生の日本語授業のあり方及び日本語学習に関するビリーフをしっかり把握していないと言える。

カンボジアの大学生達の多くが日本語を通しまして、長い内戦渡ってきたカンボジアの国作りのいい人材になろうと思っているため、貧困さの激しい状況の中で学生生活を送りながら、大学における日本語教育に対する期待をますます大きく抱いている。それゆえ、技術及び経済発展の進んでいる日本からの日本語教師方及び日本関係のことをよく理解しているカンボジア人教師方に非常に頼りし、期待している傾向が見られる。ところが、教師の方が日本語学習者により早く日本語を覚えてもらおうと思っているため、自分自身の日本語授業のことだけ、例えば教案の準備や宿題の採点などのことばかりを考えているように見える。その結果、教師方は自分の片方の都合に合わせ、教室内外で学習者にむりやりにさせたり、モラルハラスメント的な行為をしたりして、多くの学習者に嫌な思いをさせたのではないかと思う。

結論を言うと、カンボジアにおける大学日本語教育現場の上記のような問題を解決するためには、すぐれた教師が求められる。佐長(2009)が述べられているように、すぐれた教師には専門的な資格が欠かせない。その資格は、4つに大別し、第1は、教職にたいする使命感と学生にたいする愛情、コミュニケーション力などの社会的な能力である。第2は、学生の特質や発達に関する知識と生徒指導の能力である。第3は、学校運営や学級経営に関する知識とその能力である。第4は、教科の内容に関する知識と授業の能力である。

展望：将来的には本研究の結果からは単なる日本語という言葉のみならず、ふさわしい日本語教育を通しまして、お互いカンボジアと日本の両国の国民がもっともよりよい友好関係、文化関、または人材育成、さらに係経済関係との強い繋がりになることを願っております。